

## 【巻頭言】 附属学校教育局次長 雷坂浩之 「給食を守る人たちに感謝！」

- 2 ● WWL事業「令和5年度連絡協議会」を開催 ―――梶山正明
- 3 ● 小学部5・6年生「学年の枠を越えた合同遠足」 ―――佐東真由子
- 3 ● 小学部5・6年生 移動教室 秩父・長瀬 ―――谷川裕子
- 4 ● 蓼科生活という伝統行事の意義 ―――赤松幸紀
- 4 ● 令和5年度 理療科教員養成施設スポーツデー/体育実習 ―――濱田 淳
- 5 ● 令和5年度 関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」の開催 ―――深江健司
- 5 ● 探究を外国語でー英語科SSHワークショップー ―――須田智之
- 5 ● 附属中の運動会 ～継承と発展～ ―――川崎 修
- 6 ● 高校生、スマトラの植林地を歩く ―――吉田賢一
- 6 ● 中学部の理科・出前授業『昆虫について学ぼう!』 ―――杉田葉子
- 7 ● 地域に開かれた学校づくり ～点字体験教室の開催～ ―――山口 崇
- 7 ● 「美意識」を育てる(研究発表会) ―――高倉弘光
- 8 ● 共生シンポジウム ～共生社会を目指す芸術・文化交流の集い～



筑波大学  
University of Tsukuba



# 給食を守る人たちに感謝！

附属学校教育局次長 雷坂浩之



RAISAKA  
HIROYUKI

学校が夏季休業中の8月25日に「令和5年食中毒防止に関する講習会」が附属学校教育局主催、附属学校食育推進部会の主幹により実施されました。この講習会の対象は、栄養教諭をはじめ調理師さんや炊事婦さん、家庭科教諭、事務職員などの各附属学校の学校及び寄宿舎給食の調理業務に従事される方々です。当日は、給食を実施している附属小学校・附属視覚特別支援学校・附属聴覚特別支援学校・附属大塚特別支援学校・附属桐が丘特別支援学校・附属久里浜特別支援学校の6校から54名の方々の参加がありました。



講習会は、文京保健所の職員による「食中毒の予防と対策」と題した講演を聞き、そこで学んだことをもとに日常業務を振り返り、それぞれの職場で抱える問題を改善するための話し合いを学校単位によるグループごとに行いました。

この講習会は25年来行われていて、多分その成果だと思うのですが、附属学校群においては、現在までに食中毒をはじめとした給食における大きな事故は発生したことがなく、安全安心な給食の提供ができています。これも一重に、各附属学校で給食業務に携わる方々の努力と誠意の賜と考えています。

近年では、アレルギー除去食や留学生を対象としたハラルフードなどに取り組む学校もあり、給食に求められる多様なニーズに対応している姿勢には頭の下がる思いです。この稿をお借りして、心から感謝申し上げます。

## WWL事業「令和5年度連絡協議会」を開催

附属学校教育局教育長補佐 梶山正明

「令和5年度WWLコンソーシアム構築支援事業およびSGHネットワーク連絡協議会」(文部科学省・筑波大学共催)が、6月30日に東京キャンパスにおいて、4年ぶりに対面開催されました。当日は、WWLカリキュラム開発拠点校等25機関、SGHネットワーク参加校47校などから117名が参加し、各校での研究の進捗状況や課題についての発表や情報共有が行われました。

午前の部は、呑海教育長による幹事管理機関挨拶、文部科学省の水田大臣官房文部科学戦略官・教育改革特別



幹事管理機関挨拶(呑海教育長)

分析官による挨拶があり、三井参事官補佐から今後のWWLコンソーシアム構築支援事業について

の説明がありました。

続いて、WWL令和4年度指定校の名古屋国際中・高等学校、滋賀県立彦根東高等学校と、令和5年度個別最適事業指定機関である長野県教育委員会から、取組等発表があり、質疑応答の後、黒田企画評価会議委員、橋本企画評価会議委員からコメントがありました。

午後の部は、5～6名ずつでのグループ別協議を行いました。テーマは、コロナ後の海外交流活動、高大接続(先取り履修)、開発したカリキュラムの展開・活用・発信などで、対面ならではの活発な意見交換が行われました。

その後の全体発表で、各グループにおける協議内容が共有され、久野企画評価会議委員からのコメントがありました。最後に、企画評価会議の萱島座長から代表挨拶・総評があり、盛会のうちにプログラムが終了しました。

全体発表会場



## 小学部5・6年生 「学年の枠を越えた合同遠足」

附属久里浜特別支援学校 教諭 佐東真由子



おにぎりづくり

小学部5・6年生は、春の遠足として横須賀市くりはま花の国に、山道を歩いて行きました。

本番前に2学年合同で複数回の事前学習に取り組みました。まず、集団で

安全に気を付けて歩くことができるように山を登る練習を行いました。出発前に歩く順番を確認し、片道約1時間かかる道のりを半分程度から始め、徐々に距離を延ばして往復しました。

遠足当日は、学校で、昼食のおにぎりを自分の好きな食材を選びながら作り、それを食べることを楽しみに出発しました。山道の途中では、歩くペースが遅い友達に寄り添って歩いたり、「頑張れ。」と声を掛けたりといったように、友達を思いやる姿が見られました。友達や教師からの励ましもあり、全員が最後まで隊列を大きく崩さず、目的地まで辿り着くことができました。事前に山登りを経験していたこともあり、児童から「あと半分だね。」「もうちょっとだね。」と、見通しをもって活動できている様子も確認できました。

山登りの達成感もあり、自分で作ったおにぎりは格別に美味しかったようです。笑顔であっという間に食べ終わってしまいました。昼食後は、友達や教師と一緒に遊具での活動をしました。この活動の中でも、遊具を譲り合ったり、追い掛けっこを楽しんだり、普段交流がそれほど多くない、別学年の子供たち同士での関わりが多く見られました。

今後も、学年の枠を越えた学習や活動を通して、人との関わりを深め、豊かな心を育てていきたいです。

山登り



5年集合写真

## 小学部5・6年生 移動教室 秩父・長瀬

附属桐が丘特別支援学校 小学部主事 谷川裕子

附属桐が丘特別支援学校小学部では、3年生以上から2学年合同で宿泊を伴う行事を実施しています。家や学校から離れて過ごす宿泊を伴う行事は、子どもたちが小学校生活の思い出として挙げるのが一番多い行事でもあります。

今年度の5・6年生は、6月に移動教室を1泊2日で実施しました。移動教室では、チョコレート工場見学、絞り染め体験、飯盒炊飯等を行いました。事前に友達と協力しながら調べ学習を行い、準備万端で出発しました。

チョコレート工場では、チョコレートの香りがあたり一面に広がる中で製造ラインを見学し、商品が出来上がるまでの様子を真剣に見て回りました。絞り染め体験では、模様づくりにそれぞれ工夫を凝らして一生懸命に取り組んでいる姿が見られました。



工夫を凝らし模様づくりをした絞り染め

帰りのバスでの感想で、子どもたち

が一番心に残ったこととして発表したイベントは飯盒炊飯でした。飯盒炊飯では、かまどの火の勢いに驚いたり、固い人参がなかなか切れなくて苦労したり、玉ねぎを切るときに涙を流したりしながら、みんなで協力して一生懸命にカレーライスを作りました。初めて飯盒を使い、うまくできるか心配したごはんも、ふっくら炊き上がりました。自分たちで作ったカレーライスは、「ほっぺたが落ちそうになるほど美味しい!」カレーライスとなりました。

調べ学習から当日までそれぞれが自分の目標を持って



力を合わせてカレー作り

行事に参加し、友達と一緒に過ごした2日間で、たくさんの思い出をつくることができました。



思い出に残る2日間を過ごしました

# 蓼科生活という 伝統行事の意義

附属高等学校 教諭 赤松幸紀

【1日目】蓼科山を背に、女神湖畔で昼食



附属高等学校では、夏休み中に長野県の立科町にある学寮「桐陰寮」を基点として行われる1年生のクラス合宿を「蓼科生活」と呼び、毎年実施しています。(学年を

問わず有志の生徒が参加する形のものもありますが、本稿では割愛します。)学級担任の立場から今年度の実施をふりかえり、行事の意義と生徒の受け止めについて述べます。

この行事には大きな目標が3つあり、毎年『しおり』を通して必ず参加者全員で共有します。3つのうち、特に「先輩(OB・OG)との交流を深め、桐陰寮を利用して筑附の伝統にふれる」ことを明記できるのが強みだと思っています。遠足や登山をはじめとする諸活動においては、引率に付き添ってくださる有志の卒業生の助力が不可欠となっています。更に、これまでに多くの卒業生が行事運営に携わり、現地で可能な活動の幅を広げてくださったことで、生徒が自主性・自律性を育むための土壌、いわば懐の深い環境が形成されています。今回も多くの卒業生から協力を得られたからこそ、生徒が伸び伸びと活動できたのだといえます。

現1年生はコロナ禍のもと中学3年間を過ごしており、合宿などの集団行動を伴う行事への参加経験が少ない学年です。そのためか、生徒が出発前から現地での活動に寄せる期待が、例年の1年生より強く滲んでいたように思います。学校への帰着時、蓼科生活に再び参加したいか尋ねたところ、予想以上に多くの生徒が手を挙げたのも印象的でした。いま目の前にいる生徒たちが、また新たな伝統を紡いでいくのだなと実感しました。



【2日目】付添いの卒業生を先頭に蓼科山頂へ

【2日目】蓼科山頂  
予定していたポーズで



# 令和5年度 理療科教員 養成施設スポーツデー/ 体育実習

理療科教員養成施設 濱田 淳

江ノ島に到着、この後大惨事が…



理療科教員養成施設では、毎年5月に全体行事として、施設学生スポーツデー委員の企画によるイベント「スポーツデー」を開催しています。

この行事は、在学生同士、在学生と教員他との親睦を深めることを目的としています。本年度は13日(土)に開催しました。あいにくの天候でしたが、主に電車での移動なので……、と考えたのが少々甘かった。電車の中では、委員の活躍によってとても快適な時間を過ごせたのですが、島に渡る江ノ島大橋で、この日最強の風雨に襲われ、傘は役立たず、全員濡れ鼠と相成りました。杉山和一(江戸期五代将軍綱吉の病気を治した全盲の鍼師)に因んだ江ノ島ツアー、シーキャンドルからの眺望を楽しむという内容でしたが、一部実施不能になりました。それでも、逞しい人達はスポーツデーなのにも関わらず、食べてばかり。



江ノ島大橋、風雨に曝され…

施設学生の多くは視覚障害をもっていますが、そうでない人も在籍しています。周囲の状況や移動介助の方法に関する情報を伝え合い、まさに手を取り合い、楽しく有意義な時間を過ごしました。そして、イベント参加者達は第二幕を目的に、新宿の界隈に消えていくのですが、その後JR大塚駅界隈で目撃された人達もいたようです。元気のいい学生達でした(このイベントによるコロナ感染者は出ず、不評に終わるかと思いましたが、みんな楽しそうだったし、よかった、よかった)。

みんな、いい顔!



## 令和5年度 関東地区聾教育研究会 「聾教育実践研修会」の開催

附属聴覚特別支援学校 教務副主任  
深江健司

6月22日(木)、23日(金)、令和5年度関東地区聾教育研究会「聾教育実践研修会」を開催しました。この研修会は、関東地区の特別支援学校(聴覚障害)の先生方を対象に、聴覚障害児教育の基礎・基本及び可能性の理解を目的として毎年開催しています。今年度は2日間延べ186名の先生方にご参加いただきました。

4年ぶりに公開授業と授業研究会・情報交換会を参集参加型で実施することができ、授業を基に参加者と直に意見を交わすことの大切さを改めて実感しました。今後とも、参加される先生方のニーズを汲み取りながら、聴覚障害児教育の専門性の継承、発展のために、センター的機能としての本校の役割を果たしてまいります。



幼稚部の授業研究会・情報交換会の様子

## 探究を外国語でー英語科SSHワークショップー

附属駒場中・高等学校 英語科教諭  
須田智之

本校の英語科では、毎年3回、7月・12月・3月にSSHワークショップを開催しています。講師は英語プレゼンテーション指導の専門家であるMr. Gary VierhellerとMrs. Sachiyo Vierhellerご夫妻。中学・高校生の希望者と国際交流プログラム派遣生徒を対象に、10年以上に渡って講座を担当してくださっています。

今年の7月15日(土)に実施された講座のテーマは“Impromptu Presentation - Pros and Cons”。あるテーマに関する長所と短所について、グループごとに即興スピーチを作成し発表した後、講師の先生方からアドバイスを頂きました。講座の最後には質疑も活発に行われ、充実したワークショップとなりました。

英語での探究活動の入り口として、将来様々な場面で英語でのプレゼンテーションをする機会があるであろう生徒の皆さんに、是非一度は体験して欲しいワークショップです。



Gary先生は日本人宇宙飛行士の英語コンサルタントも務めた



全国のSSH校で活躍のVierheller夫妻

## 附属中の運動会 ～継承と発展～

附属中学校 運動会指導委員会 川崎 修

令和5年9月16日(土)、第69回大運動会を開催しました。記録的な猛暑に加え台風や雷雨も影響し、準備は困難な状況が続きました。しかし当日は天候に恵まれ、競技にパフォーマンスに行事運営に生徒たちの熱気が溢れる運動会となりました。そして、感染症の影響を受けてきた運動会からまた一步前進し、伝統種目のムカデ競走が3年生の種目として4年ぶりに復活しました。また、委員の生徒は、ダイバーシティの視点から能力や性別に捉われずとも公正に平等に競い合える競技のルールを検討し、「運動会の新たな形」を探りました。附属中の運動会をどのように継承し発展させることができるのか。先輩から後輩へとバトンが引き継がれ、運動会は歩みを続けていきます。



4年ぶりに復活した伝統種目「ムカデ競走」



上空から撮影 最優秀賞チームのパフォーマンス

## 高校生、スマトラの 植林地を歩く

附属坂戸高等学校 教諭 吉田賢一

原生林で保護されている像と一緒に



スマトラ島プカンバル市を訪問する日本人高校生は、本校の生徒以外にはいないと思う。インドネシアのシナルマス財閥の中核企業であるAPP（アジア・パルプ・アンド・ペーパー）社を訪問した。アジアNo. 1の生産能力を誇る紙パルプの工場を見学し、そのスケールの大きさに、参加者一同驚嘆の様子だった。

私たちの生活はグローバルな生産関係の一部に組み込まれている。授業だけでは実感しにくい「日常生活とグローバル社会」との関係を生徒は身をもって体験した。

加えて、COVID-19のせいで途絶えていた姉妹校訪問も実現した。インドネシア環境林業附属林業高校（プカンバル校）、及びボゴール農科大学附属コルニタ高校を訪問し、生徒は親交を深めた。さらに、新たな姉妹校としてインドネシア教育大学附属高校を訪問し、国際連携協定の調印式を執り行うことが出来た。

スマトラ島からジャワ島へ移動した一行は、グヌン・ゲデ・パンランゴ国立公園を訪問した。青年海外協力隊として私が勤務していた国立公園である。なかなか日本人が訪問することができない場所である。生徒たちは、原生林や村落開発のモデル地域を訪問し、国立公園のスタッフからレクチャーを受けた。

旅行会社は決してコーディネートすることができないスタディーツアーが附属坂戸高校にはあるらしい。なぜ、こんなフィールドワークを開講することが出来るのか。その秘密を知りたい方は附属坂戸高校までお問い合わせ下さい。



植樹を体験中の生徒

## 中学部の理科・出前授業 『昆虫について学ぼう!』

附属大塚特別支援学校 中学部主事 杉田葉子

様々な種類の蝶の標本を見比べて



附属大塚特別支援学校では、令和4年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、生活科・社会科・

理科の教育課程開発に取り組んでいます。中学部では、その一環として、5月19日に特定非営利活動法人の日本アンリ・フェアブル会「虫の詩人の館（フェアブル昆虫館）」から3名の講師の先生をお迎えして、理科の出前授業を行いました。

最初は、昆虫とその他の虫の違いや、生きている蝶の幼虫やカブトムシの成虫を見せていただきながら説明を聞きました。

次に様々な昆虫の標本を虫眼鏡でじっくり眺めたり、標本の昆虫と図鑑を見比べたりして観察しました。それから、一人一つずつ好きな昆虫の標本を選び、昆虫の様子を絵に描いて表現しました。事前学習で昆虫をイメージして描いたものと比べると、頭・胸・腹を意識して描き分けたり、足や色等の特徴に気付いて描いたりする様子が見られました。

昆虫を苦手としていた生徒たちも様々な昆虫を知ることができ、自ら昆虫に触れる姿も見られました。「(蝶には) 色々な模様があること、(カブトムシの) 足の部分はトゲトゲしていて少し痛かった」等の感想を伝えてくれる生徒もいて、実物の昆虫を見て・触れて・感じる事ができたようです。

最後に、貴重な標本や昆虫をたくさん準備して下さった日本アンリ・フェアブル会の皆様に感謝の気持ちを込めて生徒会長が御礼の言葉を述べ、各クラスの学級委員が作業製品をプレゼントしました。



蝶の標本を虫眼鏡で観察



昆虫を観察しながら絵を描く

## 地域に開かれた学校づくり ～点字体験教室の開催～

附属視覚特別支援学校 副校長 山口 崇



石川倉次胸像

5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類になって以降、外部からの来校者を積極的に本校に招くことができるようになりました。そこで、開かれた学校づくりの一環として、子どもたちの夏休み期間に合わせて、点字体験教室を開催しました。

点字に焦点をあてたのは、

本校が盲学校であるだけではありません。日本点字の父である石川倉次が、本校の前身である訓盲哑院、そして、東京盲哑学校の教員として、心血を注いで、ルイ・ブライユの発明した点字を日本語に翻案したからでもあります。その翻案は、1890年に正式に日本の点字として採用され、現在に至っています。

7月27日には、近隣の目白台図書館のスタッフを含め、14名が参加し、点字入りの名刺をつくる体験をしました。

参加者は、6つの点の構成からなる点字を、一マスずつ点字器を用いて打ち、完成した名刺は全盲教員が指先で読みました。「正しく書けていますね」の返答があると、皆笑顔になっていました。参加した小学生は、夏休みの課題研究として、点字のことをもっと調べてみたいと感想を述べてくれました。今回は、点字体験だけでなく、触ってわかる地球儀や視覚障害者用算盤などの教具の紹介、音楽科によるミニコンサート、資料室見学を加え、本校の教育活動や歴史を知っていただく機会となりました。

町内会の地域住民を対象とした点字体験教室を初めて実施しましたが、今後も本校の教育活動を身近に知ってもらい、理解者を増やす取り組みを続けていきたいと考えています。



参加者の点字入力を確認

## 「美意識」を育てる(研究発表会)

附属小学校 教諭 高倉弘光



講堂での全体会の様子

去る6月10日(土)、11日(日)に、附属小学校では研究発表会を開催しました。

コロナ禍の影響で対面での開催は、実に4年ぶりでした。久々に全国各地から多くの参会者が集まり、生の授業をご覧いただき、熱い議論が繰り広げられました。

本校では、令和2年度から4年間、「『美意識』を育てる」をテーマに研究を進めてきました。同時に本研究は、文部科学省から研究開発指定(4年間)を受けています。100年を超える人生をいかに力強く、共に幸せを感じながら生き抜くか。また日進月歩のAI開発に関わる研究。それを支えるような教育の在り方も模索しなければなりません。一方、獲得したあらゆる資質・能力を子どもたちがどのような方向に発揮させるのか、ここにも教育の責任があると考えます。これらの課題を解決すべくキーワードに挙げたのが「美意識」でした。

そして、これらの課題の解決を考えたとき、我が国が現在抱えているカリキュラム・オーバーロード問題の解決が、どうしても必要であるとの見解に至りました。この4年間、各教科等で一度ゼロベースに立ち戻り、小学校ではどのような学習内容が必要なのか、それをどうつなげてどのような系統を立てることができるのか、授業を通してどのように「美意識」を育てることができるのか、研究を深めることができました。

本研究には保護者はじめ多くの方にご協力いただきました。ここに御礼申し上げます。(本研究の成果は、来年1月に文部科学省でも全国に向けて発表させていただきます)



総合活動部会の様子

# 共生 シンポジウム

～共生社会を目指す芸術・文化交流の集い～

2023  
12/10 日

13:00-16:00

申込

11月30日までに

<https://forms.gle/Pb8SEmUqG4azdUka9>  
よりお申し込みください。



場所

筑波大学附属中学・高等学校 桐陰会館

講師プロフィール

古市 理代  
(ふるいち みちよ)

NPO法人アクセptions 理事長  
NPO法人ピープルデザイン 研究所理事

講演の演題

『多様な背景や能力を持つ  
人々が共に学び、成長する  
社会の実現をめざして』



2004年に生まれた息子にダウン症  
があったことをきっかけに2012年  
NPO法人アクセptions(※1)の  
立ち上げに加わる。日本で初めて  
NY発祥のチャリティーウォーキング  
イベント『パディウォーク』を渋谷で開催。2020年まで毎年東京  
で開催。NPOや様々な活動を通してダウン症のある人とその家  
族そして誰もが個性を発揮して楽しめるインクルーシブな社会を  
目指して活動中。2021年からNPO法人ピープルデザイン 研究  
所理事として参画し、アクセシブルな図書の普及活動として「りん  
ごプロジェクト(※2)」の事業を進行中。

※1 <https://acceptions.org/>

※2 [https://peraichi.com/landing\\_pages/view/ringoprojectbook/](https://peraichi.com/landing_pages/view/ringoprojectbook/)

13:00 開会  
13:03 教育長挨拶  
講師紹介  
13:10 第1部 講演  
14:10 第2部 シンポジウム  
各校代表による発表  
15:10 質疑応答  
15:25 来賓挨拶  
16:00 閉会

後援

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

poster design

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部普通科 五代みゆき

## ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア  
paulownia

vol. 58

発行日……令和5(2023)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 呑海沙織

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌  
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印刷……広研印刷 使用紙: U-limax [日本製紙]

